

# 高専とTOEIC

北九州工業高等専門学校 准教授 大谷 浩

## 全高専の九割がTOEICを実施・活用

全国高等専門学校英語教育学会（COCE T）のホームページ（<http://cocet.org>）に「TOEICに関する調査」というリンクがある。そのページを見ると、国公私立を合わせた全高専六二校のうち「TOEIC受験を義務づけている」が三三校、「受験義務はないが」学内版TOEICを実施している」が二三校、「何もしない」が一校、「未回答」五校という結果が示されている。つまり九〇%にあたる五六高専でTOEICが学内実施されていることがわかる。

またTOEICの試験結果をどのように活用しているか、に関してはTOEIC運営委員会が「TOEICテスト 入学試験・単位認定における活用状況二〇〇八」でデータを公表している。この冊子を見ると、アンケートに回答した計四七高専のうち四三高専が、本科及び専攻科においてTOEICを単位認定や専攻科修了要件として活用していることがわかる。やはり九割を超す高専がカリキュ

ラムの中でTOEICを活用しているのだ。このような「高専とTOEIC」の強い結びつきはどのようにして生まれたのだろうか？そしてそれは高専生にとって望ましい状態なのだろうか？

## 独法化、専攻科、JABEE

筆者が北九州高専に赴任したのは平成十一年（一九九九）であるが、ちょうどこのころから高専は大きな変革に見舞われることになった。その最たるものが独立行政法人化であり、いわゆる「親方日の丸」の学校運営を、独立採算制へと転換することが求められた。これを機に各高専は競うようにして専攻科を設立した。自らの学校が生き残るためには五年制の本科だけでなく、さらに高度な教育課程を持つことが必要不可欠だと感じられたようである。

さらに独法化は、外部評価への対応を迫り、各高専は、工学系の外部評価で大きな影響力を持つJABEE認定を目指すことになった。高専も専攻科を設置することで学士の取得が

可能になり、本科四、五年と専攻科一、二年の教育プログラムが審査対象に該当したからである。

このJABEEの技術者教育基準に「国際的に通用するコミュニケーション基礎能力」があり、どこの高専も、それを証明する数値基準を求めた。その「物差し」として、当時急激に認知度を上げていたTOEICが注目を集めた。日本語名称が「国際コミュニケーション英語能力テスト」となっている点も、求めているテストにふさわしいというイメージを与えたかもしれない。こうした経緯で高専全体がTOEICの導入へ大きく動き出したと考えられる。

## TOEICの台頭

しかし従来、日本で英語力の物差しといえど、まず英検（実用英語技能検定）だったはずである。それ以外で認知度があつた英語検定試験は、TOEFLと通訳案内士試験などであつた。なぜTOEICが急激に知名度を上げたのであろうか？



「存じの方も多いと思うが、TOEICは日本の経団連と当時の通産省の要請で誕生した試験である。確かに英検は検定試験として一般に広まっていたが、当時多くの企業が「ビジネス界で必要とされる英語コミュニケーション能力」を測定する試験が存在しない、と感じていたのだろう。そこで、前述のTOEFLをはじめ数々の英語検定試験を運営する米国ETS (Educational Testing Service) に開発を依頼し、第一回TOEICテストが一九七九年にスタートした。当然、日本の大手企業や日本で活動する外資系企業などは、徐々にTOEICに注目し始め、一九九六年には富士通が社員全員にTOEICを受験させた。

二〇〇〇年には国内受験者数が一〇〇万人を突破した。二〇〇三年ごろには日本IBMが課長以上へはTOEIC六〇〇点、次長以上には七三〇点という基準を設けたことが大きなニュースになり、ほかにも多くの企業がTOEICを使った同様の昇進基準や採用基準を設けはじめた。

従って中高生はともかく、就職を希望する大学生やビジネスマンたちの関心は、自然と英検からTOEICへとシフトした。全国の高専がJABEE対応の為に、「国際的に通用するコミュニケーション基礎能力」の物差しを求めているのは、まさにこの時期だったのだ。参考までに二〇〇八年度現在、TOEICは世界約九〇カ国で実施され、受験者総数は年間約五〇〇万人に達している。但し、日韓両国だけで総受験者数の七割強を占めており、TOEICの知名度が高いのはおそらく日本と韓国のみである。とは言え、試験は全て英語で実施され試験結果もスコアで示さ

れることから、日韓以外の企業にとっても英語を母語としない社員の英語力がつかみやすい利点はあるだろう。

## 高専生にTOEIC?

TOEICが企業や社会に大きな影響力をもち、高専においてもTOEICがかなり浸透している背景をここまで論じてきた。ただ、高専生にとってTOEIC対策の英語学習が有益かどうかは別問題として考える必要がある。「TOEICはビジネス中心の英語試験であり、工学系の学生には向かない」とTOEICに否定的な教員も少なくない。実際、JABEE審査の基準としてTOEICだけでなく英検やACE (桐原書店)、工業英語などの基準も併せて取り入れている高専も多いようだ。確かに一種類の試験だけで受験者の実力を測りきることは不可能であり、筆記試験でコミュニケーション能力を実際どこまで測れるのか、という根本的な問題もある。後者はさておき、TOEIC以外の基準も織り交ぜながら柔軟にJABEEの評価基準に対処しようとする傾向を、筆者は大変望ましいと考える。

余談ではあるが、個人的にはどの試験を基準とするにかかわらず、JABEE審査を契機として高専生の英語力に外部評価が入り始めたことを歓迎している。中学校でも高校でも、上級学校への入試という外部評価があるからこそ、学校を上げて生徒たちの英語力向上に力が入る。大学や高専などではこれまでこうした刺激が希薄であった。外部評価の導入で、今後高専の英語教育に良い変化が訪れることを期待している。

## TOEICに見る高専生の英語力

最後に「TOEICテスト DATA & ANALYSIS 2008」から高専生に関連するデータを取り上げておきたい。

|                     | リスニング | リーディング | 合計   |
|---------------------|-------|--------|------|
| 公開テスト(全受験者)平均点      | 315点  | 265点   | 580点 |
| 公開テスト(学生全受験者)平均点    | 301点  | 249点   | 550点 |
| 公開テスト(高専)平均点        | 254点  | 185点   | 439点 |
| 公開テスト(高校)平均点        | 306点  | 216点   | 522点 |
| 公開テスト(大学)平均点        | 302点  | 251点   | 553点 |
| 公開テスト(大学院)平均点       | 306点  | 277点   | 583点 |
| IPテスト(全受験者)平均点      | 249点  | 198点   | 447点 |
| IPテスト(企業・団体)技術部門平均点 | 240点  | 196点   | 436点 |
| IPテスト(学校)高専平均点      | 207点  | 138点   | 345点 |
| IPテスト(学校)高校平均点      | 237点  | 158点   | 395点 |
| IPテスト(学校)大学平均点      | 243点  | 189点   | 432点 |
| IPテスト(学校)情報科学系平均点   | 223点  | 168点   | 391点 |
| IPテスト(学校)理工農学系平均点   | 224点  | 175点   | 399点 |

データの基になる母数の違いもあるので、単に平均点だけを見て高専生の英語力を判断することは難しい。ただ、高校生、高専生、大学生の平均点の結果は多くの読者の予想と一致するのではないだろうか？ また専門分野別に見ても情報系、工学系の学生は全般的に英語が不得手ようである。この傾向については総合大学の教員たちからも耳にすることがあり、今後の調査研究が必要だと思われる。